

発行者：厚木交響楽団 友の会事務局

暦の上での「立秋」はどうに過ぎたといふのに、まだまだ残暑厳しい今日この頃でございます。ずいぶん長い間ご無沙汰してしまいましたが、友の会会員の皆様にはお変わりございませんか？

長く続いた梅雨と、その後いきなり襲ってきた猛暑の日々に、体調を崩された方もいらしたのではと案じられます。

来月になれば、少し落ち着いて音楽でも聴こうかなという気持ちになれるのではないかでしょうか？10月6日(日)の厚木交響楽団第83回定期演奏会では、ブルックナーの交響曲第7番と、モーツアルトの「ハフナー」交響曲を取り上げます。ブルックナーの交響曲の中でも最も人気が高いと言われ、この7番より新たにオーケストラに加わったワーグナー・チューバの温かくやわらかな音色が、きっと皆様の心に沁み入ることでしょう。対して「ハフナー」はキビキビと明るく快活な演奏を目指して、目下弦の奏者たちが奮闘中です。

友の会事務局の岡田はこの夏、この二人の作曲家にゆかりの地を訪れ、素晴らしい体験をすることが出来ました。そのお話はのちほどさせていただくとして、まずは当団の大切な解説員である大塩聰子さんに一年半ぶりにご登場願いましょう。

オーケストラの楽器は？と問われて、真っ先にヴァイオリンを思い浮かべる方も多いのでは？でも実はその横に控えるちょっと大型のヴァイオリンもいるのです。いえいえ、チェロではなくて「ヴィオラ」のことですよ。



夏の思い出 in ザルツブルグ



解説さと子の

気まぐれ音楽だより

vol.2 ヴァイオリンとヴィオラ

今回は、ヴァイオリンとヴィオラについて、語らせていただきたいと思います。

誰でも知っているヴァイオリンに対し、ヴィオラは知る人ぞ知る楽器、といったところでしょうか。オーケストラでは、向かって左手のヴァイオリン群に対し、右手側に座ります。

姿かたちは大変良く似た楽器ですが、演奏者人口の差は歴然としており、最初からヴィオラを始める人はとても少ないです。しかし、「人手が足りない」という実にシビアな理由でヴィオラを始めたにも拘わらず、そのままヴィオラを弾き続ける人が増えているのも事実です。弦楽器奏者が取り憑かれるヴィオラの魅力、その正体とは一体何者なのでしょう？



◆楽器の違い

ヴァイオリンからヴィオラに転向する人が多いと前述しましたが、楽器の形も構え方もほとんど一緒だから、そんなに苦労せずに持ち替えられるのかな？と思いつか、そんな簡単な話なら、この世のオーケストラはヴィオラ奏者不足に悩んでいないのです。

まずは2つの楽器の違いをお話しましょう。ヴァイオリンを基準とすると、ヴィオラは一回り大きく、厚みがあります。サイズは規格が決まっておらず、大体全長40cm前後で幅広く作られています。ちなみに日本人は身体が小さいため、比較的小さめのサイズが標準的に使われます。もちろん大きければ楽器はよく響きますが、弾き手の体格に合っていないければ、そもそも良い音は出せないわけですからね…

それぞれの開放弦はこの通り。

ヴァイオラの開放弦

ヴァイオリンの開放弦

ヴァイオリンの開放弦

ヴィオラの開放弦

つまり、ヴァイオリンの最高弦が無い代わりに、**最低弦側に1本追加**されているわけですね。しかし、低い音が出せる=太い弦を鳴らさなくてはならないため、ヴァイオリンに比べると意識的に「**しっかり**と」音を出す必要があります。弓のサイズは製品によって差がありますが、長さはほぼ同じで、重さはヴァイオリンに比べるとヴィオラの方が少し（大体10gくらい）重いです。弓だけでなく、楽器本体も大きく、また部分的に重いため、ヴァイオリンで慣れていると、最初の頃は**バランス**を取るのに非常に苦労します。そして極め付き、なんとヴァイオリンとヴィオラは、楽譜も違うのですよ。「**クレ**」と呼ばれる、**五線の最初にある記号**が違います。ヴァイオリンは「**ト音記号**」、ヴィオラは「**ハ音記号**」というクレをそれぞれ用います。

Violin (同じ音です)
Viola

記譜上の音符をなるべく五線の中に収めるために、このような使い分けをしているわけですが、却ってややこしい事態に…しかし、両方の楽器を弾く奏者さんによると、「慣れてくると、楽器を持ちかえれば、自然と頭が切り替わる」と言います。そう言われると、**二刀流**をこなす人はとても頭が切れるように聞こえるかもしれません。しかし、とても高い音を表記するとき、ヴィオラの譜面にいきなりト音記号が登場することも。すると、すっかり慌てちゃうのも、ヴィオラ弾きという生き物の愛すべき習性です。

◆ヴァイオリン属の歴史

現在のヴァイオリンの仲間に通ずる、ヨーロッパにおける弓奏弦楽器の仲間は「Viol(a)」などと呼ばれ、大きく2つの種類に分けることができます。元々**腕で構えていた型**を「**ヴィオラ・ダ・ブラッチョ**」と呼び、これが後の**ヴァイオリン属**（ヴァイオリン、ヴィオラ、チェロなど）のルーツです。一方、脚で挟んで構える型を「**ヴィオラ・ダ・ガンバ**」と呼んでおり、これは後に**ヴィオール属**を指すことになります。いわゆるコントラバスのご先祖様に当たる楽器たちのことです。

現行のヴァイオリン属は、少なくとも16世紀のイタリアには存在していたと言われています。その頃から現在まで、ヴァイオリンという楽器の形はほとんど変わっていません。進化していないと言うよりは、当時に**ほぼ完成形**に近い状態で生まれた、と言えるでしょう。

その歴史の中で、ヴィオラという楽器は長いこと「**ヴァイオリンの派生楽器**」という立場でしかなかったため、独奏楽器として使われることはありませんでした。しかし、その音色の幅広さ、豊かさからソロでも活躍するようになり、ヴィオラのための協奏曲や、さらには無伴奏ヴィオラソナタまで作曲されるようになります。

とはいって、ヴィオラという楽器は、その**知名度の低さ**から、ヴィオラ弾き自身によって自虐的なネタにされることもしばしば。これも愛情の裏返しとも言えなくもないですが、もっとヴィオラを知って、愛して欲しい…！そんな想いを乗せて現在ヴィオリストとして活躍中の、東京フィルハーモニー交響楽団の首席奏者である須田祥子さんが率いるグループ、その名も「**SDA48。**」なんと、メンバー全員ヴィオラ奏者です（48人は居ません…たぶん）。イロモノ感がありますが、ヴィオラだけで多彩なアンサンブルを聴かせてくれる稀有な存在です。

◆役割の違い

そんな変わり種も存在しますが、合奏の基本型ではヴィオラが担当するのは、和音を充実させる**伴奏（内声）**です。しかし、曲の中で役割が入れ替わることで、色彩豊かな演奏をするのがアンサンブルの醍醐味ですから、ヴィオラだってその**渋い音色**で主役を担当することもあります。今回演奏するブルックナーでも、ヴィオラは素敵なメロディを奏でてくれますよ。対照的に、もうひとつのプログラム「**ハフナー**」では、もっぱら脇役に徹しています。

管楽器がパイプオルガンのような**重厚なハーモニー**と**響き**だとしたら、**弦楽器**は様々な**風景**を描いているかのよう。迫力のサウンドに圧倒されるのもオーケストラならではの魅力ですが、多彩な楽器の個性を意識して鑑賞すると、お気に入りの楽器が見つかるかもしれませんよ。（大塩 聰子）

●大塩聰子さん自身が両方の楽器を演奏する「二刀流」奏者であり、最後に次のような「本音」を漏らしてくれました。

本来は不快な音であるはずの「物をこする音」ですが、ヴァイオリンやヴィオラの音色はそれを長所に変えて、まさに人の心を「かきむしる」かのように、聴く人の心をダイレクトに揺さぶります。

ヴァイオリンは凜と毅然とした美しさを持っていますが、ヴィオラには、さらに寄り添うような、包み込むような優しさや温かみも含まれているような気がします。

ヴィオラを弾いていると、ちょっとだけ、大人になったような気分になるのです。



特別番外編

Japan Bruckner Symphony Orchestra



第3回 日本ブルックナー交響楽団 ザンクト・フローリアン公演

演奏会日程

ウィーンミノリーテン教会 公演

2019年8月24日（土）19:30 開演

※ザンクト・フローリアン修道院 公演

2019年8月25日（日）17:00 開演

指揮

長野 力哉

演奏曲目

アントン・ブルックナー作曲

交響曲 第8番 ハ短調 全樂章

交響曲 第7番 ホ長調 第2樂章

日本ブルックナー交響楽団とは…

ドイツ、オーストリアの教会でブルックナーの響きを体験してみたいという動機から2014年に立ち上がったアマチュアオーケストラです。指揮者長野力哉氏を慕って、関東ばかりではなく北九州からもメンバーが駆けつけました。そして実現された2度の演奏旅行。2015年ベルリン・ニコライ教会、2017年ポツダム・エアレーザ教会、いずれもメンバーの心に深い感銘を与えてくれました。

いつの日かブルックナーの故郷であるザンクト・フローリアン修道院でブルックナーの交響曲を演奏したい。ブルックナー自身が聴いていた響きを体験したい。そんな究極の夢が、早くもこの夏現実のものとなったのです。

この「日本ブルックナー交響楽団」、国内では「リキ・フィルハーモニッセス・オーケストラ」と言う名称で活動を行なっています。(教会をモチーフにした可愛らしいイラストのチラシをご覧になったことがあるでしょう?)

2015年秋、ブルックナーの交響曲を第1番から順に取りあげるというプログラムで活動を開始し、年2回の公演を重ねながら2019年6月の第8回演奏会で、交響曲第8番まで到達いたしました。

それを引っさげ、新たなメンバーも加えての今回のフローリアン遠征となったのです。

厚木交響楽団からはコンサートミストレスの天野克子先生を筆頭に、15名の団員が参加しました。海外遠征は今回初めてというメンバーもいれば、天野先生のように他のツアーも入れるともう何度も海外で演奏しているというメンバーもいます。それでも「ブルックナーの聖地・ザンクトフローリアン」へ乗り込むのは、それまでのツアーと違った覚悟、緊張感を伴うものでした。

演奏会の詳細は、以下の長野先生よりいただいた手記をお読み下さい。きっと会員の皆様にも私達の受けた感動・感激が伝わるものと存じます。

フローリアンの庭に居るブルックナーさん（オブジェ）△



ザンクト・フローリアン公演を行って参りました。

8月24日の夜7時半からウィーンのミノリーテン教会で演奏会をして翌朝9時にバスで3時間近くかけてザンクト・フローリアンに移動しましたが全員に疲れた様子はありませんでした。

疲れ以上の期待に満ちた喜びやエネルギーをザンクト・フローリアンから受け取っていたのだと思います。

ザンクト・フローリアン修道院は小さな村に、不釣り合いなほど立派で大きな建物でした。演奏会場となった大聖堂、礼拝堂は実際に入ってみると席が500席前後のこじんまりとした空間でした。

大聖堂の入り口頭上に大きなオルガンがあり、そのオルガンをブルックナーが弾いていたわけです。このオルガンの真下、地下にブルックナーの棺が置かれています。

私たちは地下に降り、この棺とご対面をした後、聖堂に戻りブルックナーオルガンのコンサートを小1時間聴きました。

このオルガンは小鳥のさえずりのような可愛らしい弱音から、大オーケストラの迫力までが出せるダイナミックレンジで、しかも聖堂自体がオルガンと相俟って、ひとつの楽器のような響きを作り出していました。



大聖堂入口に埋め込まれたブルックナーの墓碑。
真下の地下に棺が安置されている

※ザンクト・フローリアン修道院:オーストリアで最大かつ最も有名なバロック様式の修道院のひとつで、ウィーンから150km西のリンツ郊外ザンクトフローリアンに位置している

音色にはトゲトゲしさがまったくなく、すべてが柔らかく私たちは自分達のコンサートの直前だというのに、完全に窓いで音楽に身を委ねていました。

この場所が最高の音響をもっているのが、この時に確信できました。

オルガンコンサートをゆったり聴いてしまったせいでリハーサル時間が40分程度になってしましましたが、本番前のピリピリとした緊張感はありませんでした。

ウィーンのミノリーテン教会もザンクト・フローリアン修道院もコンサート会場ではないので、幅が狭く、その分奥行きがかなり深くなります。

金管楽器、打楽器は相当遠くに位置することになるのですが不思議と心配や不安感はありませんでした。

棺に掌で触れて、ブルックナーの弾いていたオルガンを直に聴いたことで誇張ではなく、私を含めオーケストラ全員がブルックナーに見守られているという安堵感をもっていたように思います。

リハーサルのとき、残響が若干長いかな、と思いましたが、本番では絶妙な残響時間でした。

舞台両脇には1列の客席がありますが、ここには司祭が座っていました。

本番でのオーケストラは音楽に集中没頭していましたが、しかしそれは尖った鋭いものではなく、柔らかなもので、難所を易々と超えていました。ブルックナー8番の3楽章のアダージョが静かに終わるその時に、遠くから6時を告げる鐘の音が小さく聞こえてきました。

鐘の音が3楽章の余韻と一緒に、ブルックナーから私たちに与えられた同意のように感じられました。

鐘は耳をすまなければ聴こえないほどの音量で、場所によってはまったく聴こえなかった団員もかなりいたようです。実は朝比奈先生と大フィルが演奏した時は、3楽章が始まる前に鐘が鳴ったそうです。

そしてもうひとつ、いつの時からか祭壇中央に光が差し込んでいました。

すべてが霊的な奇跡のような体験だったのです。

私達は最高の仕上がりで演奏を終えることができました。

ウィーンでも、ザンクト・フローリアンでも、こちらのお客様は本当に静かに聴いて下さいますが、不思議と息が詰まるような雰囲気はありません。

空気は柔らかく自然に流れています。

ここが東京、日本のコンサートとかなり違うところだと感じます。

演奏直後、拍手はしばらくの間ありません。こちらが戸惑うくらいの余韻のあとに拍手をいただきます。同行していただいた音楽ジャーナリスト池田卓夫さんが我々の演奏を「献奏」と表現してくださいました。

ウィーンからザンクト・フローリアンに向かう車窓には、緩やかな丘陵が広がるばかりで賑やかな場所はありませんでした。

ザンクト・フローリアンに入ってからもそこは町というよりかは村といった場所です。ブルックナーの終いの住処となった場所は、ウィーンのベルヴェデーレ宮殿内の管理人小屋ですが、そのすべてからブルックナーの抱いていた孤独を感じました。私達が奉げた演奏をブルックナーが受け取ってくれたと思いたいですし、今回のウィーン、ザンクト・フローリアンでの体験を通じ、ブルックナーの音楽に対し謙虚でありたいと思いました。

長野 力哉



「ブルックナーオルガン」



本番＝至福のとき



窓から差し込む光に包まれて

參加した団員の声

天野 克子先生（コンサートミストレス）

ザンクトフローリアンは日本からはるばる訪れた私たちオーケストラのメンバー一人一人に奇跡の音楽性をプレゼントしてくれました。まさに今まで経験し得なかった深い、想いの途絶えることのないブルックナーの音楽が私たちを包み込み、奇跡の名演奏になりました。



島 達朗さん（フルート）

演奏の前に全員で修道院の中を見学。我々が演奏するブルックナーの棺がここのお爾がんの下に置かれており、その棺を見てブルックナーを感じ、そのあとに入った大聖堂の素晴らしいに圧倒され、本当にここで演奏できるのかと夢のような気持ちになりました。

その大聖堂のパイプオルガンの生演奏を聴き、その素晴らしいに皆感動しました。名オルガン奏者でもあったブルックナーをさらに身近に感じ、みんなの気持ちがさらに一つになり、その後の実際の演奏は、今までにない名演となりました。

私はブルックナーの緩徐楽章（今回では7番第2楽章、8番第3楽章）は本当に心を打つ名曲と思っているのですが、ステージからその壮大な天井画や壁画を見ながらこの名曲の響きに埋もれていられたことは本当に幸せでした。